国立国会図書館　　恋若竹 3編 208-703

ガラス使用

恋の若竹　二編　下

208
703

国立国会図書館　恋若竹 3編 208-703

ガラス使用

深契恋の若竹後編巻之下

情話

第十一套

江戸

十返舎一九作

恋の初まりといへども。往昔とは一別なるものゆゑ。
形こそ。程なく釈迦の女人を除ものとせり。ひとり女の中ゐ歌妓ぞと。智恵を
たくまれたものゆゑ。彼がとこ女の恋の智恵を
もつて。歌を仕し。弦を推く。軍法の利ひらを出

国立国会図書館　恋若竹 3編 208-703

ガラス使用

ものと見えて。狂古銭の完中に。白指さして。歌妓の
あまたでも。軍師の神同入せーよの変ず。多た外
次席とお角が如た。おつみ入れくそびるるそのそ元
結だん時にいうて。孔明。楠のの如た人出ることもえおびが
そうこたみそ乃ぞさうべー。嗚呼隙ハ隙座ちうの加減。
されば外次席ハうまくと計策ふおもち入さくうの屋
雲の細ものもまう。用ひたもかさ分されが藁木橋へ
おりもたて。お角に遊び果ーて彼が悔ぬのうる色男の

あうて支ゆるる自ら承勤めよるうとうんの由其ぶ私
よく言うて。狐狸のみを仕
留に報ひせせんものと。みの中に出安ーて。立出んと
まるとうふまう「どちらから和是ませんが。お役がまり
ましー「ゑんざことも云わ人のう「ゑふうらね
るをやて。お役いまぐに帰りまーさ「ドレゑんざよさる
をぎぶの。そ妻出の末坊めそのと戸沢外次席さみと。林三楽
よう。ハア此世話ようさ人ぶ。やレく彼の人をどこへ

国立国会図書館　恋若竹 3編 208-703

ガラス使用

いつさ。どうも町名が日ろうぬ
こまろさ。どちへいつさ 外「あの人は成田の方へ
かまーさ 外「あり田屋の寮の方へ 外「成田
さまのあう人 外「あんのみさ。まさ居眠をして愛でもそ
のう 外「ねむりの方へまわりまーさ。たつお濃乃愛
さん 外「成田さま人まわりにいくのかのそを渡り
うまちろう 外「あをぬうまちろ 外「あのぎ追うみてそまの
かーこまろまーさト驚しが 外「あの川岸をたりへまわり

まさ 外「呼びか人ものざへ。いそがしのうに 外「見てこんとあうさやろうさかろうそくかろうのと
そのうちで 外「もう君にあうねんへ。ようくうちやろてあけ
のそこそ 外「そんざ白紙へろくてひらき
織地そーて。羽級と一疋と。裏地の絵が五反ふ筋お博
さ多の等がひとふ。パテどうもこからねえ建と乳をつか
ぢひおで。こび菜矣等の細のとあうのとの紬が一反
ぢ。同じその万筋と。細戸の万筋と。かろ絵うと

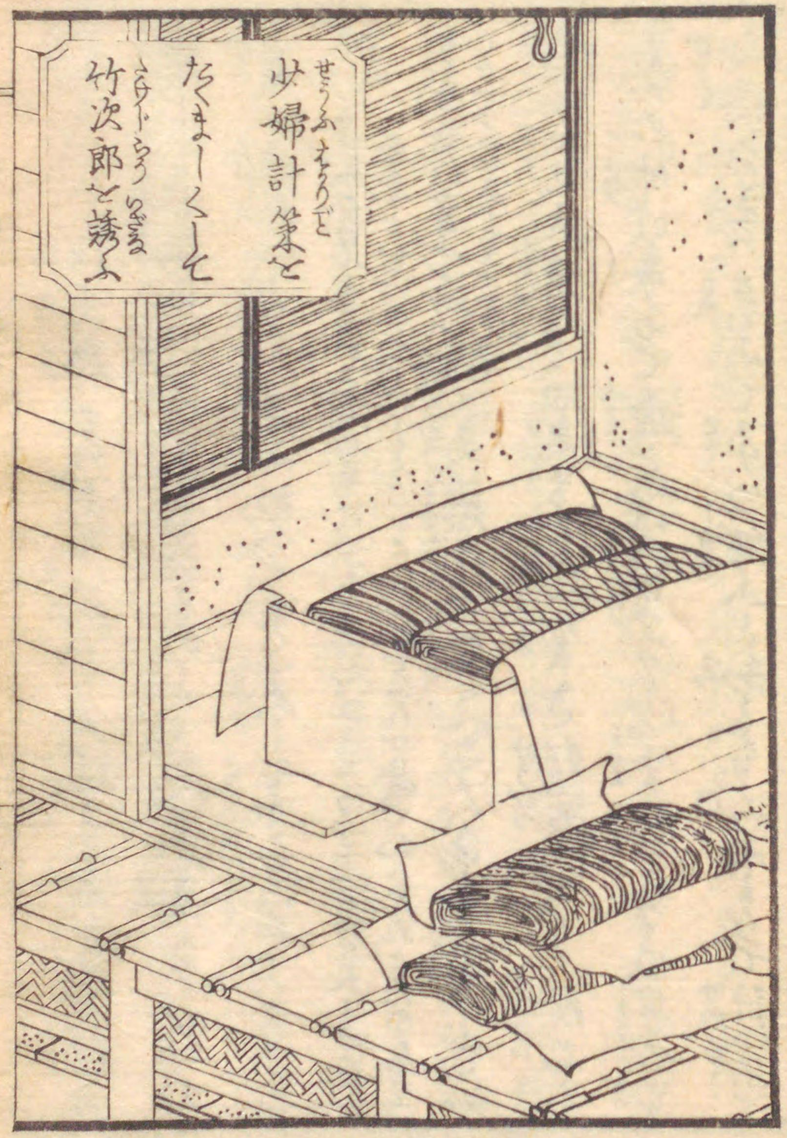
国立国会図書館　恋若竹 3編 208-703

ガラス使用

おくく五反。それをうづれもてんれのみ幸吉でせんで。
の〳〵
賢斗をはけてとゝハテどうも合点がいかねえ。
ひとひとの休「ハアそんぢや先夜の始末の品物
ならぬ。よござーゆるん。おれより外に
異ひ毎う取ひかの若どもお系おゆるのもの。
支度そへおそま入れ狭もの。兄合せやべく。
私おうよきにとびとやべくと。ゝめゆへども。
失礼おへおうゆへども。人遠ひおくおまりなまいりの

るまつ兄ゝ月ひゆるるまで兄。舞相のあるぢう。
やまのの経まぐに新じく
ゐまる。おぜおあげ月貝かかけ
引越ーゆのゆ兄。追てさ
出立被笠文度ホ混雑仕りゆる。まこと仕このねゆ。且
先夜の挨拶をど。ゆ品名分れ。ゆ掛らまゆて。
おくさうおれ入ゆる。文て右ホのゆ紀かとさるまぐく。私へ
のゆ紀とおがーめ。お角方の笑ぐんぐ那ひ上ホ先ハ

国立国会図書館　恋若竹 3編 208-703
ガラス使用



国立国会図書館　恋若竹 3編 208-703

ガラス使用

あるく〳〵。ハテ〳〵文舞でも。あの奴でも。梯子乗どのく新吉
対〳〵そふおもひ町廻りもさうのこと角がつのいふく男かんてもユまつてやらめやアるのよね
又トアやうけんもるのさまが牛次郎うれがそ。はそんもものこれうさ吉うそくお角に参ふとう〳〵ふ悪指の週るべき人るのが果〳〵てお角がこと考くる由多。まさ源雲き狂言るのぐう。流石大むく始るまで。それまでの間ふと新るも人ふりて計策を

狂言。家が参まで始れば牛次郎うそ。狂言未揃よいう。例の事多の二階めく〳〵別て
きんやうの女バイさやうでござりま弁。今日はどんのよう
あんだのが悪くて。こんるおめでござん弁。まずうござ
お角さんが出るのので。迎ひのお家がおうござのへまるそと

国立国会図書館　恋若竹 3編 208-703

ガラス使用

仲「どうもまぐ新地小間物所の。まが妻ろくてこまるといつも
ろ「おそうざんだろうあつまやろおく 仲「うんでもいくつうる世 悦ひ
ちゃうとでもようとろうてやつておくまる 女「まア勿つく
ようませうト人もくやてその ろ「最よく入ッまやんまし。
女ぎうりのできそう
お角さんとおろうまやろさのの 仲「
さうざがあろるさんちゃとあま人に笑てそれるようといつ
ろ外のようでへろんが。あのおろ角のろそのへろんとつく人ぐ
らう教へくおくまる 女房「どうも気の毒あま人さんへそう

好ろてお出るさるざらうとありひまし。まんかうこさ
ろうが清介。あのみみかぎろうてろ。ろ男らんものろ。
茶ふまろくてもでざんまりせん。まア容子をろるところが。
おま人さんお実ふ生ろうろ病ともりろさやふ。
だでまア人の噂あへどうも居るンだっさ。男とりみものろ
おま人さんとこれて旅つくろ介。ぞうも
好ひ添のりのざねへ。そのるようきろとろ介。
かろんそうろありどおま人さんが婚へかろ。これが私ろへと。

ガラス使用

そんるいうて居りまする 仲「イヤあのみが病気とい
のも。きろと色のあるのを。あれぢろうろーが変ろめさのさ
女房「るのんと。変とあようもるのをぐらうぢゃござの
ませんっ 仲「るまき今の世界に色を売る女というがあって
たまるものう。とんざ奥ふくく貢ぐ。大金の生娘さへ。それ
それよまうりの残これのおあのるのをー
がひざりの残。落ゆか紫殻のの色気で妻ろる商だん。
どうもそりやっあの人のらみのの古代のぐろと時代るる女の

るぢらう 女房「まァきうるうまそれをしてお直るさのまう。
ろさらーが。あのること腹と合せく。おまへさんを一だん引
かのようとろうさ尚がちぢひまーさ仲「こんうのおやまさ。
あまへとろるがふ出ふ出へろう。その年周りぢ 女房「まァお角
さんを注まくまあり仲「う。お對でお乳ーるさのまー
トころひるぐう出てもく氏自さけさ
うものかへの女どもをせんちどひさくる
よう。抱まをくろーく知りろるのめく。落ちの一の口てう吉吉
よう。仲「注角がちりぐのうち来るべー。その時へかりくと。

国立国会図書館　恋若竹 3編 208-703

ガラス使用

ちゝめ〳〵合せの物まくあり。箱ふたを引ずらし〳〵さうよかくとうるさゝもの。さゝぬが毒へがらうるまびるり

第十二套

ありぜん式の膳に其吉いわう角に密〳〵と舎まるべく。外は扇にあをひたるうらべ。脚のまるか愚痴ぢよ欲くべし。まる伯父をちゞめ親類よりの名を呼れても。かるうずまア尚分のうちへ。まくの角ハどうりの人を細やうに分られども。男よかくて世話まる客が深

切ようち仕せく。右も左もと田舎へそ。たゞ外ひとりが夢ゆ一ツ。まく。あるび。勤いそんかうせんと。いろ〳〵とをりく変もくうかく〳〵後へそる。容貌といひ。義といひ。座敷をもつと。客のあしらひ。何ひとつぬけめなく。江戸よ一とそ二のうるさお角も。実のみよ喰くる時分。珍がまる愚かまるもの。他の素人ゆ考るものそ。勤うりくと考へて。ひとうるさので花ともと称らせ花うり娘〳〵。男おまるものもそりくよ。ムれうまく〳〵そりくと答ハで

国立国会図書館　恋若竹 3編 208-703
ガラス使用

彼処へ曲く途中まで送り出ようと町かく「ゑくさん
まことにおまへのお蔭ざよ
のうへ。そまるらが よくおいで。ここへ
を移さく勿辞と分そ。こまもうせる 嬉ざ生で。おお
でいおとの親向がめんだうざ。そて一昨日お発ちさ
そをりかく「アイのそこんで居てよ
ーを迎のよおそー かく「アこれ
「お角さん久ーぶりだの。どう

かく「アイ漸よおひさーぶりでお目にかゝりまをねへ。ささくも
久ーく引こんで居りまーさ
やうざト当月ばかりひろめのそ
うち女ばかりでまさへくる
るらぬもあり。まさ四ー
とらの人を知て居らざらうのに
ません「それるらがおまへの伯父
さんの知れることへくる。まァまのがその人に
あつるのでもさる世話よるの さ。そのこと逃さ出さうが。

国立国会図書館　恋若竹 3編 208-703

ガラス使用

お角さんもめんかさらく男があるさうなが。あんまり衆
をそろこと為ゆもるうず。親族の人ゆも気どりぬせる
やうるのがあるりのざが。人ふ新られさうのあま之
のる。実ふ今がおーん時ざうう。ちろと色るの方へ
なのてんみーてあのて。勤をふ粧を如ーてござらう
かく「そんざられるをあのひざわ人ト引如ーのちがふ北ひとが
ちらふかく「そんるう着てそろーよ色男があるとろうく
それと
お出ざれ 女「まァそんるりのさ。まいあろても当りめ人ざ

くう。そんのそろーが色るのおもうさまでんあるめ人し。
それをもるの。おりひ切れのとのみるでんるのが。只是
ひよおろうて那ふまぢん。ざうざ是まぞの安ふ粧如ーて
ざ度愛をつとそて。お我衣もざめ安ん台る於つめーて
おんなせ人。実そとりぶ什一こさ。何も釈迦ふ仏ふと。
ゆるさろるあま人よ。ぐく抱をいのでるわ人か今支るざ
るろーが什ゆふ度とそるのを。安ふ事ぐられるとあうまるの
ざふ。そのるうがあま人さんの詞をたて。随分粧如ーて

国立国会図書館　恋若竹 3編 208-703

ガラス使用

勧めまそうが。勧のるうねこそ〳〵が病気の根なとうみのい。
色変があつてとうみのでそうるのく。ばちんせんうるおまへさんかく
もそのへうのかう。実のかんまのみをおそ〳〵やまが。何うも
私うのお性〳〵でござの外が。被めまそうこ庵から物さん人が
ありまをそうまでど。その人が気ばくくてどうもをそ〳〵ても
きいてられず。あうまやうとそうちうこん人ゆも名をそうられ
さうさう〳〵のみ。是まで色らんうをせねのが自慢さ
みるのふいうさん夫とう出〳〵て物さが周果そのみの整の

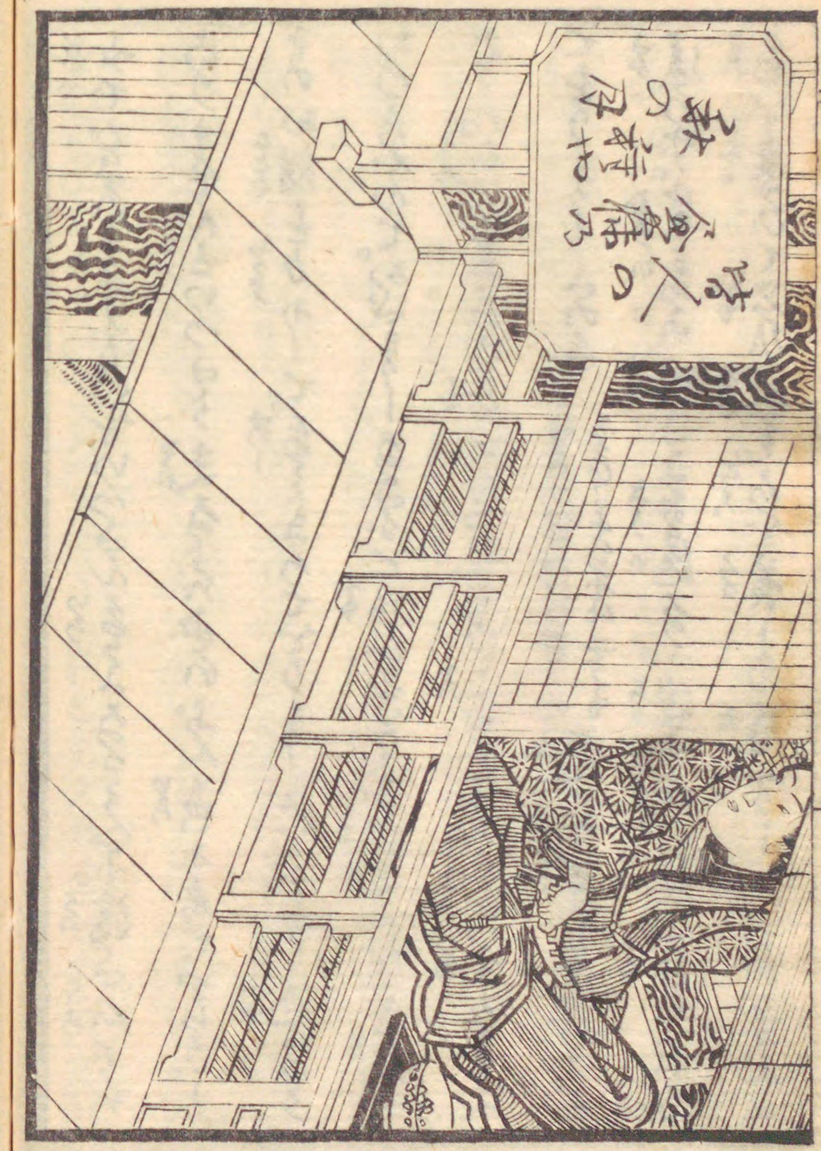
ずれせその居ぬと。兄婦まそうやがるう病気をゆ
でもありさうね。ねんにだうらんうをもんで。まぐふ
づうのかうりまをのさ。あまん人さんのお祖をそくあげるかうり
あ。どうぞばこそ〳〵が物さ男をそうもうそうさのまう〳〵
それかうそ〳〵がもで出来さ人まるみうう「おまへさんの
引合ばうぐ。きうと出来るの筋さ〳〵そうがある
のでるく。出来るのでぎれてあとうみのかん。
ぎにぶんこそ〳〵の物うさ男う。又そうみくとも伝染のお薬

国立国会図書館　恋若竹 3編 208-703

ガラス使用

人でさへあるものを。きのふと今日お引うけて。媒介をしてお上ようかなんか「おまへさんも男だらうその翁をお引なさいまをせよ」「よせやいかうりんからめへ。武士ふうに金打ちようといふところさ」といふおろくしてゐるうちに「ささくの婆さんといふ女でござりまするが。ちよつとお目をおかけなすつて下さりませ」「サアどこの誰だえ。きれいかへ」「きれいのとおりのひざうけやうだのこをまそ居てもかへつて

女でござりまするといふさんでござりまするよふ人ぶさんでありませんといふまへ。それでもおまへ。ぶんぶんぶん



国立国会図書館　恋若竹 3編 208-703

ガラス使用

そのうちふと云ひまれどおそろしくそのあかりもおぼろげにて
おりひめも如何さずうとせ〳〵と。おかしくもあはれにも
おぼふやうでおくそんなさるれ。コレさて〳〵も実不男の冥理自
分で自分の色の熟枝。こんな無造作なるものありやせん。
さうるうち足うおうらへあてかく「きろ〳〵と色みてそれろ
「こちからあみまぜさ。ちろとかさその至をトてうの指
ロろ色と指のにろ〳〵。さそるとうと縮緬でう。ちろ〳〵と
お畑とるそ〳〵とよべが下ろうと気をきかせ。おろをうし

取りのさろみ。燭を点てろうそ「女ヨヤ丸が落てまろうほさ
「てうど足がぬれるのさろ〳〵ざか「ア、おそのさんが出るのを
あん案じて気ともんで居ましたろうとちろとんで悦ぜませ
せう「よびをやってくれる「女「かしこまりました〳〵と吉をよびやる
「ホンニ人の事ねうちふとうとうとう

手紙まア夫もらつて嬉しいが。それがあまくよまるうら。伯父さんとゝみでも泊のでふるんぞ上てくれる。又金の入るものるくらいくらでも。いくらでもつてよこまがいくとをもどかくおくそ色恵といふ内わも。金でまるうと。ふ高い高いでまるも色を遠ひまもやるみ。れ角あまくさんをたのみて。ゆづらでも今を貰ふと。怒こ乳とりふうをまもんばのち金のるくかの字もいろつておらぐるのこさーものおまをもみて勤よ精をせ出さまれが。なひとう不自由ハちまもんやるまもよくくのるので。こまる筋がみるうらが。お世話ゝもるりまもうトされのるふてのきびがきくわど。外ひとうハ耳心ー。ゝくこ考へるが。押て泊もとも。ゝ乳又ゝ。ざれが。そ佐ふおくゝ金是よりお百も来り抓ふをつて計器の。的中ーなるとを密ふ拾びるふ振ゆふ酒ゝ豪もるけるふ成りて。外泊ふ席ふ客ふ泊り。翌日迄に異服反ゆくまくのる反抱世夢地るど足踏ひ。約合二十両錄のふどが何とるく。お角が母へとて

国立国会図書館　恋若竹 3編 208-703
ガラス使用

えだものの余令をそうを添て持せやりぬ。依仏ばけ後ちびく参ひ。お角と源兵衛中とるう。二世も三世も法花と。かく契約まこうりーが男女と秋の一夜と祖三のごく仏ばかハ又おもかげるのこれて。通ひ路も跡くありお角よろも辺重衣とともに新兄弟ハ一日が百年ありどのやひろれべ。重に法花のる意の淵。浅瀬ハさらみんえざりる。祖れども濃のおもかげるのも。そ修めりるうぎべ附くハ通ひて。契ちず契る仁。兵衛ががる

脇の月をそえてたきやうにるう。かくまるるあり。ありもあろうひーるぞもるう。初てその年も暮て。暗月の下旬のあるる雪も消るハ消んもるうが当ひ。ぜひにる遠ざる仏ば扉めあまるところ。ありもやせん。さるくハんよそまるれ祝の。ありてみるうと業が別ひ長ことかく封じおる。仏利くるおるる海せば。仏乃まる御の暗号る仏ば根るう。みるひとりて開るも せぜ。祝箱の引出ハ入れよりて「コレ三れ。その薬未持乃

国立国会図書館　恋若竹 3編 208-703

ガラス使用

役「ハイ ちょっと
ふところをりさせつれせつれ
仲町まで参ろう。四五遍もとおまって行
あとあさのまと「くようく トお角へおくるんだとかいてある
をりかう あるてえどやくくと
「この様の四五遍行ったり来たりまでしょう
トへりくるまでの三町と
ちがの絵ばかり文助ばかり
又大「これお揃ひぐどえ 三四軒始めだろう。揃えみお
を誘ひやうといふ役又さ「ようらりく。まアひとり上ろう
楽「あれサ肉でから酒をのむようのむのだろう。
を揃ふ揃て居るものもあろう 「さうまぐまお供と

役「殺さう トふところかのて「これくお角がのとよう 三松「ハイ ちょっと
おくるう。先刻の役がまいりました 三松「かしこまり
まし 文助「このあらお義まり
各「各のくんだ 文「ホイ大きく
さあやろうぬもあろう。ぐまちもぐろのもと殺さう
トふところ大ぜの
うちわれらでやく 〇弦角へ「ハイ
あるて「ヤ先ハ帰よりの返事を役の者より
せねえ 役「エヽ。ちがのへ殺しません 角「そこそこ是ぐがおねが

つくもをつくのつく人　つく「イヨあのいつものさんまいどんとういふ
ぶつ　ぶつ
俗がか「てごうもおかーのつく「ドレおえせうさいまー。おんみ
これ　どんな
色の是好きなやまるあろうとも。そこるこーもいそ　ぶつ
用があつてのこだ。毒虫もえずとえて　まゐりまーす。今一
ど　変いつてまゐりませう　かく「ヨホよのョどうでおいでござらう
トつくひをかへてとぐんのまつの　うち
ふるふるねがひよきえるその文さい○けるどんにあるうちへ入おん
めめだいくるず。ぶるづーくぞんどおびらーまおつえせん
をりどのつくづぶまうひわたされひや。おけられよおんどられゆ

たぐろうぬ月とらふうちおもやめ月ふるりゆべく
ゆくー。ことお世るどもまこーれ世うをまりゆ抜おてまゐおお
まてよんろうふるうず。ひとうをとをみそうりーおんまへまのの
お自せおれ。うくえけいやくせーこ入かどのやうるるありとも
そらいまでもをひとびると。あんとまそくーみトよみさーるそのとろへ
世「おうくや　かが「てびろうきさうるる世「あーいまごのうかき屏を
やいうぶたべうろ　トいふおへんぶも　世「たべるさいかく「てやうまーいよ
せずとんでる
かきのもの丸うところちが焼うる。そぶれつて入今をやコレひや

酒と見へるのんでまそうやト薬らんのひや酒とぐろと
〇爰ハ其坂屋のあるあ。這ろだれておこうてあ
僅僅もるわどふ。お爰れ例のかき根ねうち。三松が梅のおと
わそのいさづうしそ居るとよび「ヨイてあ侍どん」「ろまうさ
のイトてあ「ろんざるきのうさ凡る。コレとおうでござ人あのでき
「お角さんのとこへ「どのこの「のところよ。おめんあや
をしれ人。おいうのお供もそいくとの。菓よやるふうをろるぜ。
おめ人ハ風の来をとられさだろうざねう「するんでもやうよ。

ぐあるもるのぐの。それ支ろいぐが。先刻をんドを出てお座
うもろさもぐざ。爰ううちろと出ぐそろる「うろ
廿人のう。へんじくと裏と表ろう。芸ろやろさ「がうくらひ
むこの引出「うろ「ハ氏ろあれるのくつぶろぐ。角と出せるう
一ふうの来と知「
まさぐふあるそまで「そんるちっぷける角が始ようる
ものう。ドレ上ぐんのまずとそれをんせるイトうろお角さま
作作うとんろうろおやくとうあのて「ヨそぐ〳〵。
おめ人のまのくつぶろう。お狼さまが角と出そぐらう。

国立国会図書館　恋若竹 3編 208-703
ガラス使用

コウよ俤どん。こんこァ宇ぶがよめれんへの義「あれさるむ
ちくごん「まゝよりくトはまことをもぐさるおうそみそを
きのみむろごのふ。ムがりうるのんぞとう大そうらくく
ぞんどん。たとへどういのるがあるともきみそうまぐとう
う。きんでもふうぬとぞんどおりうるのふ。あんどて
きんのあとうれ。おやうだのがうめもにあうねおもちと
おうくん。ふれ誘れてう物やきへいくう。そこたよう
うおそくおみうよか
トよみおうてさをかく
てあうるかとうそう

急の若竹後編之下終

なうのうら恨めしき男やと狂乱のごとく立休。居の後立
ふのうち
こそそうたりうれ。

○山坂うの灸のう遠あく朱の筆が双方
あく。迷惑きそう。入くみてあのがうふ
添切と。おかくがうる義理とう坊の面
まうたおがうへ云扇へのびうく
筆ととめぬ

国立国会図書館　恋若竹 3編 208-703

ガラス使用

秘方 萬金丸功能書 小半劑入 代百二十四銅

東都作者 十返舍一九著 歌川國直画
全畫工 戀れ若竹三編引つゞき賣出し
風月花情 春告鳥 初編三編 為永春水作 引たゞ出販 歌川國直画
小傳馬町三丁目 丁字屋平兵衛販
東都書肆

国立国会図書館　恋若竹 3編 208-703

ガラス使用

代の豪傑にも劣らぬ丈夫にて有ながら
しかも此の粉本家業、其外ゆかりの
筆と称するけれどもーうつがひそのまゝの
筆ゆゑひざるとこれのやうなひのよく
像ごとの画ものの実に絶
金牧めるべーくべーくのみ独書るよろし

本家

江戸両國横山町三丁目　大坂屋半藏

京都賣弘所　蛸薬師通東洞院東ヘ入　大和屋彦右衛門

大坂賣弘所　心齋橋筋博労町　河内屋重太郎

次

取

国立国会図書館　恋若竹 3編 208-703

ガラス使用

208
9
703

右の薬一包ヅヽ煎じて飲ませ候へば、世上にある雑薬とは違ひ、即効あること、実に神の如し。依て此薬を製して、世上に弘めんと欲すれども、元手乏しくして、思ふまゝに弘めがたし。然るに此中に富貴の人ありて、此薬の効能を聞き、大いに感心し、元手金を出して、弘めさせんと申されしかども、其人の名を出すことを好まず、ひたすら貧人の為に施さんことを願ひ、名を出さゞるゆゑ、其人の名を記すことあたはず。

鮮毒養童丸
壹包代百銅
半包代五十銅
小児たゞちに一通の妙薬
御薬調合本家 東府陰醫 岡田三折製
賣弘店 江戸両國横山町二丁目 大坂屋半藏
取次 諸国書林 道中書肆

国立国会図書館　恋若竹 3編 208-703
ガラス使用

208
9
703

国立国会図書館　恋若竹 3編 208-703

ガラス使用

国立国会図書館　　恋若竹 3編 208-703

ガラス使用